

(様式1)

視 察 報 告 書

令和6年6月18日

鳥取市議会議長 西村 紳一郎様

鳥取市議会建設水道委員会
委員長 勝田 鮮二

本委員会は、下記のとおり委員を派遣し、行政視察（調査）を実施したので、その結果を下記のとおり報告します。

記

1 期 間	令和6年5月13日から令和6年5月15日まで
2 派 遣 先 及 び 視 察 (調 査) 内 容	<埼玉県川越市> ○ウエスタ川越について ・主な施設の視察 ・目的の達成状況と効果 ・課題と今後の展望 <東京都> ○下水汚泥の有効活用について ・東京都下水道局東部スラッジプラント及び砂町水再生センターリン回収施設の視察 <墨田区> ○すみだ大学のあるまちづくりについて ・UDCすみだ及び周辺施設の視察 ・施設の管理運営について ・目的の達成状況及び実績と効果 ・最近の取組みについて ・課題と今後の展望
3 派 遣 委 員 の 氏 名	勝田 鮮二、加藤 茂樹、水口 誠、雲坂 衛、 足立 考史、魚崎 勇、太田 縁
4 委 員 会 所 見	別添のとおり
5 参 加 者 所 見	別紙のとおり

埼玉県川越市	<p>○ウェスタ川越について</p> <p>・川越駅西口近くの塩漬けになっていた 22,000 m²の土地の利活用は、本市のこれからの公共施設の再整備に対してヒントがあったのではと思う。いかに人を呼ぶ仕掛けを創るか。埼玉県と川越市で発展的に都市計画がなされたように、本市の目の前の駅周辺及びイベントホール等の再設置計画に通ずるものがあるのではないか。</p> <p>・大ホールは約 1,700 人収容可能ということで、本市のとりぎん文化会館の規模である。令和 5 年度の利用率は、70.5%とかなりの高利用率と感じた。また、有名な歌手も利用しているようであり、東京から約 1 時間の場所に立地しているなど立地にも恵まれていると感じた。本市の駅前開発における複合施設の施設構成の在り方及び老朽化が進む文化施設の在り方について、次世代を見据えしっかりとした議論が必要である。</p> <p>・ウェスタ川越の大ホールの稼働率は、コロナ下を除いても約 7 割で推移。大ホールの事業別収支は、年間▲0.1 億円で、赤字分を川越市に指定管理料として、上乘せして補助してもらっているとのこと。人口規模の大きな川越市でさえ、音響の専門コンサルを入れ、利用者の使い勝手を工夫しつくし、集客努力しているにもかかわらず、大ホール事業は赤字であることなどから、本市での実現は大変厳しいことがわかった。周辺のホール施設の影響評価も必要。また、開発事業毎ではなく、自治体全体として毎年の経常経費がどのように変化するのか、経費の増加分を分かりやすく数値化したものを議会に説明し、評価することが重要と再認識することができた。</p> <p>・ホール内の席と席の間隔を広くとることで、すれ違いがしやすく席案内がスムーズに行えるようになっていた。また、お客様に女性が多い公演などに配慮し、トイレには可動式の壁があり、それを動かすことで、男女のトイレの数の調整ができたり、トイレブース内（個室）全てにはチャイルドチェアが設置してあり、女性や子育てにも配慮したつくりになっていた。</p> <p>・施設の前には広場があり、室外イベントが開催しやすい建物配置となっていた。かまどベンチが設置され災害時の活用も考えられていた。同時に薪が常備されていることも印象的だった。この薪は伐採した樹木を資源として活用しており、鳥取市も導入すべきと感じた。</p> <p>・都心に近いため、集客効果は大きいですが、交通の便が良いため宿泊が少ない。この点については、鳥取市の高速道路で交通の便が良くなり滞在客が少ないことに類似している。</p>
--------	--

東京都

○下水汚泥の有効活用について

・下水処理工程において、基準に適合した処理水を川や海に放流することは同様と思われる。汚泥の焼却灰にする過程において、地球温暖化対策として熱エネルギーの再利用による化石燃料の消費削減及びCO2排出削減に取り組まれている。本市においても率先して取り組むべきと思う。一方で、下水再生リン製造については東京都の下水処理量が全国の1割を占めることもあり、将来的な生産量と建設費の費用対効果は見込まれると思うが、本市にはそぐわないと思われる事業である。

・下水処理技術は全国ほぼ同程度のレベルに向上しており、違いは都市の人口規模より最適な施設の組み合わせを設計することが重要だと感じる。リン回収も水処理の過程で回収し、JA全農と共同で肥料の製品開発に着手している。鳥取市も人口的に小規模であるが、リン回収をしてお参考になると感じる。

・令和5年3月24日、農水省と国交省は、全国下水道部長宛てに「下水汚泥資源の堆肥利用に向けた活動推進について」を通知。鳥取市の焼却灰からのリン回収の事例が挙げられている。鳥取市の場合、コスト高で約8,000円/tで販売しているが、売れば売ほど赤字の状況。東京都は水2割、汚泥8割の処理状況で、水中のリン回収は、年間70トンで本施設で試験中。今後の実証実験の結果に期待し、本市でも安価にリン回収等が可能な施設の導入や、農業の堆肥だけでなく、海への鉄鋼スラグと腐葉土を利用した栄養塩イオン供給の展開の可能性を含め検討されたい。

・今後、窒素、リン及びカリウムを配合した日本産肥料を使用した栽培実験を行う農地を探していると担当職員から伺った。鳥取市の農地を活用して、大学と連携して実験することができるのではないかと。

・どちらの施設についても、規模が大きすぎて言葉にならない。

墨田区

○すみだ大学のあるまちづくりについて

・墨田区はまち全体をキャンパスの様なまちづくりを目指し、2つの大学と行政、民間が共同して都市づくりを始めている。ともすれば、我田引水的な計画になりがちでデザインを大学の若者と知と好奇心を利用して、将来の大学、民間事業者の在り方を実践していると感じる。鳥取市としても、すでに鳥取大学、環境大学があり、まちづくりを共同でデザインしていくことも出来るのではないかと感じた。

・すみだ大学のあるまちづくりビジョンとして、①「多主体のつながりとしにぎわいを生み出すボーダレスな場をデザインする」②「まち全体を生きた研究の場『リビングラボ』として地域と大学が共に学び、育ち合う」③「誰もがづくり手でありつかい手となれる多様なプロジェクトを共創する」④「地域の資源や課題と向き合い大学での研究成果をまちづくりに還元する」がある。本市でも、鳥取大学や環境大学がありますが、もっといろいろな分野で連携することができるのではないかと感じた。例えば、防災、遊休資産の活用、環境問題及び持続可能性などで大学との連携ができたらいと思う。

・まちづくりと一言で語り、どのような絵を描いて実現していくには高いハードルがいくつもあると思う。だからと言って手をこまねいていても発展はない。墨田区のような特効薬的な起爆剤があればと思う。本市では、公立環境大学により一時的に若者は増加するが、定住率が低く、人口減少に歯止めがかからないのが実態。大都市圏のリノベーションより地方の活性化したまちづくりを視察に入れてみてはどうか。

・当日の墨田区から出向の職員からは、江戸時代からの歴史から始まりものづくり現場の衰退の危機感から、起爆剤として大学誘致を行ったなどの説明であった一方、千葉大学の説明では、全国展開のUDC（アーバンデザインセンター）の考えに基づくものとし、「地域に根ざしたもの」を強く感じる事ができなかった。大学を誘致したものの熟成には時間が必要と表現した区職員の説明を聞きながら、以前視察した福井県鯖江市のまちづくりが対照的に思い出され、「歴史や伝統に裏付けされた住民参加型のまちづくり」の重要性がより明確となった。

・大学のあるまちづくりとは、これからの課題、取り組みだと感じた。